

令和4年度 奈良県立奈良高等学校 学校評価総括表

年度	令和4年度(中期計画1年目)
本校の使命(スクール・ミッション)	「自主創造」の学びを通して、日本、世界のよりよい未来に貢献していくグローバルリーダーの育成
年度重点目標	○授業等の改善・充実・・・主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業や評価等の研究・開発・蓄積に努め共有化を図る ○豊かな人間性と実践力の育成・・・授業や特別活動等、幅広い経験を通して人間力を高め、グローバルリーダーに相応しい態度と実践力を育成する ○生徒の自己実現を図る進路目標の設定と達成に向けた取組を支援・・・教育活動全体を通して、自他の個性を尊重し、主体的に進路選択できる能力・態度を育む教育を実践する

1 スクール・ポリシーの内容

教育方針 (スクール・ポリシー)	入学者の受け入れに関する方針 本校が求める生徒像(アドミッション・ポリシー)	「自主創造」型自己変革の追求 高い理想と目標に向けて、絶えず知性を磨き、自主的な判断と行動を通じて、真摯に人格の成長を目指す生徒を求めます。 ①積極的な勉学や課外活動を通して、豊かな知性の創造を目指していくような、明るく豊かな活力のある生徒 ②人間としての在り方・生き方を自覚し、堅い意志をもって自らの行動を律する主体性をもった生徒 ③自由と責任を自覚するとともに、人間尊重の精神を基盤として、多くの人と敬愛と信頼に満ちた人間関係を築くことができる生徒
	教育課程の編成及び実施に関する方針 本校が展開する教育活動(カリキュラム・ポリシー)	主体的・未来志向型の学び 未来を生きる生徒の能力や個性を最大限に伸ばすため、「自主創造」の学びを通して、深い思考力・豊かな知識の涵養を図る教育を創造します。 ①主体的・探究的な学習により、生徒の高い理想と多様な未来につながるような確かな資質・能力を身に付けることができる教育課程を編成します。 ②科学的思考力に企画提案力・マネジメント力を付加していく教育プログラムにより、科学技術系グローバルリーダーを育成します。 ③生徒が「自主創造」の精神を発揮しながら、笑顔が輝く学校生活を実現していくような教育内容を創造する。また、地域との双方向の連携を構築する中で、地域から世界に発展的に貢献していく人材を育成します。
	育成を目指す資質・能力に関する方針 本校を卒業するまでに身に付けさせる力(グラデュエーション・ポリシー)	次世代型competenceの育成 「自主創造」の精神を承継し、「自ら学び、自ら考え、自ら開拓する」姿勢を身に付け、日本、世界のよりよい未来に貢献していく人材を育成します。 ①豊かな知識、論理的・科学的思考力及び客観的判断力を基盤として、物事を様々な角度から多面的に捉え、本質を見極める力を育成します。 ②人の優しさ、心の痛みに気付き、そこから他人への感謝や相手を気遣うような「繊細で温かい心」を育てます。 ③国籍、文化の違いを超えて物事を捉え、日本や世界のよりよい未来の実現に主体的に貢献していくグローバルリーダーを育成します。

2 奈良県教育振興基本計画(「奈良の学び推進プラン」)が示す各テーマごとの学校教育目標

テーマ	学校の教育活動に関する目標(A)	計画期間における具体的目標(B)	令和4年度末の目標値等(C)	令和4年度末の状況(D)	自己評価(E)	学校関係者評価(F)	令和4年度末に対する改善方策
1 こころと身体を子どもの成長に合わせてはぐくむ	事故・けがを予防する能力や態度の育成	日本スポーツ振興センターへの災害共済給付申請数を20%削減	日本スポーツ振興センターへの災害共済給付申請数を10%削減	平成29年度から令和3年度までの過去5年間の平均災害発生件数は105.6件であった。令和4年度の年間災害発生件数は94件となった。(令和3年度108件)前年度比で約13%減少、過去5年間の平均値からも約11%の減少となり、今年度の目標値を達成した。	B	B	目標値は達成となったが、未曾有の状況にあった時期であって単純に比較できない。申請件数のみならず、その背景に思いを巡らせて事故やケガの予防につなげたい。本件は申請意思があって事務処理を進めていくものである。本校生徒の自己・けがの発生状況を分析しながら、この計画期間3年を追っていきたい。
	自ら健康の保持増進を図る意欲の向上	定期健康診断後の受診率20%向上	定期健康診断後の受診率10%向上	定期健康診断項目のうち、集団の状態をみることができる視力検査・歯科検診を重点に取組を進めた。定期健康診断後の医療受診率について、視力検査においては15%向上し目標を達成、歯科検診においては目標値達成には及ばなかったが6%向上までした。	B	B	コロナ禍にあつて医療受診や結果の提出は例年の様子とは異なる状況となった。そのため、昨年度と現状の数値を単純に比べられるものでないと考えられる。個々への保健指導はもとより、保健だより・集団指導・健康相談日の設定などを通じた計画期間3年の取組において目標に向け努めた。
	体力の向上	新体力テストで、全種目全国平均を上回る	新体力テストで、全国平均を上回る種目が80%以上	1、2、3年女子のボール投げを除いて全国平均を上回る。各学年男女合わせた総種目数から、全国平均を上回る種目が93.8%となり、目標を達成した。	A	A	ボール投げは、男女とも他種目に比べて弱い。体育の授業を中心にレベルアップを目指す取組が必要である。
	教育相談活動の推進	全ての教員がスクールカウンセリング研修会やスクールソーシャルワーカー等の事例検討会、又は生徒理解にかかる研修の機会に参加	全ての教員が今年度1回以上スクールカウンセリング研修会やスクールソーシャルワーカー等の事例検討会、又は生徒理解にかかる研修の機会に参加	気になる生徒について、担任からスクールカウンセリングへつなぐことが多くなってきた。多くの生徒、保護者がスクールカウンセリングを利用できた。また、スクールカウンセラーから教員へのアドバイスなど連携も深まった。ソーシャルワーカーとの連携も始められた。	B	B	生徒の自尊感情を高められる指導、取組が必要である。スクールカウンセリングの活用を進めたり、生活アンケートを複数回実施して、生徒の見守りをこまめに行う。
	授業アンケートにおいて、「授業を受けて、力がついたり、知識が豊かになったと実感できる。」と回答する生徒の割合が70%以上	授業アンケートにおいて、「授業を受けて、力がついたり、知識が豊かになったと実感できる。」と回答する生徒の割合が60%以上	授業アンケートにおいて、「授業を受けて、力がついたり、知識が豊かになったと実感できる。」に回答する生徒の内、「よく当てはまる」46.0%、「やや当てはまる」38.8%という結果になった。両方を合わせると80%を超えるが、「よく当てはまる」だけでは目標は達成できていない。	B	B	授業アンケートにおける評価対象に対して、質問内容自体の見直しも必要である。さらに、アンケート結果を授業改善につなげる教科や科目ごとの振り返りなどの迅速な対応も必要である。	

2 学ぶ力、考える力、探究する力を はぐくむ	主体的・対話的で深い学びの 実現に向けた授業改善	課題研究の個人用ルーブリックにおける課題解決力・科学的探究力の観点で、「十分満足できるレベル」(複合的なアプローチを行う。複数の科目領域の手法を用いる。継続的に探究活動を進展させる。)以上の評価をする生徒の割合が70%以上	課題研究の個人用ルーブリックにおける課題解決力・科学的探究力の観点で、「十分満足できるレベル」(複合的なアプローチを行う。複数の科目領域の手法を用いる。継続的に探究活動を進展させる。)以上の評価をする生徒の割合が60%以上	SSP探究Aでは、校内予選会等での発表も踏まえて、課題解決力・科学的探究力については「計画と方法」や「結果と分析」「考察」等の観点から評価した。その結果、十分に満足できるレベル以上と判断された割合は、41.5%となり、目標は達成できていない。奈良タイムについては、生徒の自己評価の内容で、「自主性がとても向上した」31.1%、「探究心がとても向上した」42.1%、「考える力がとても向上した」43.5%という結果になり、十分に満足できるレベル以上と判断される割合が60パーセント以上に達していない。	C	C	主体的・対話的で深い学びにつなげるために、課題研究や探究活動の授業をさらに活性化していく必要がある。特に課題の設定時における複数科目領域の視点や探究サイクルを何回も繰り返して進展させていく継続性等が重要になってくる。こうした観点の重要性をルーブリック等を生徒に配付しながら周知徹底させるとともに、課題研究の開始時期の検討が必要である。また探究活動の基礎を身に付けるSSP基礎・奈良タイムについてもその授業内容をさらに改善していく必要がある。	
		授業交流・公開授業において、教科・科目の枠を越えて、授業見学や公開授業を各教科で実施	全ての教員が、教科・科目の枠を越えて、授業見学や公開授業を実施	探究活動としての2年生でのES科目や1年生での奈良タイムについては、生徒の活動や発表の様子を公開し、交流が進んでいる。しかし、一般科目等での公開は一部の科目だけであり、授業見学等で交流する教員数もまだまだ少ない。	C	C	来年度に向けて、授業交流期間等を設定し、各教科で進められるよう活動を促していく。また教科の枠にとらわれず、他教科の授業についても積極的に交流できるようにはたらきかけていく。	
		授業アンケートにおいて、「考えたり、活動したり、問題を解いたりする機会が授業中にほぼよく確保されている。」と回答する生徒の割合が70%以上	授業アンケートにおいて、「考えたり、活動したり、問題を解いたりする機会が授業中にほぼよく確保されている。」と回答する生徒の割合が60%以上	授業アンケートにおいて、「考えたり、活動したり、問題を解いたりする機会(時間)が、授業中にほぼよく確保されている」に回答する生徒の内、「よく当てはまる」51.5%、「やや当てはまる」31.3%という結果になった。両方を合わせると80%を超えるが、「よく当てはまる」だけでは目標は達成できていない。	B	B	授業アンケートにおける評価対象に対して、質問内容自体の見直しも必要である。さらに、アンケート結果を授業改善につなげるシステムの構築が必要である。	
		学習意欲の向上	課題研究の個人用ルーブリックにおける主体性・主体的な活動の観点で、「十分満足できるレベル」(常に積極的に期待以上に取り組む。周囲に前向きな影響を及ぼす。)以上の評価をする生徒の割合が70%以上	課題研究の個人用ルーブリックにおける主体性・主体的な活動の観点で、「十分満足できるレベル」(常に積極的に期待以上に取り組む。周囲に前向きな影響を及ぼす。)以上の評価をする生徒の割合が60%以上	SSP探究Aでは、主体性・主体的については「課題の設定」や「発表・質疑応答」も含めて、全ての項目から評価した。その結果、十分に満足できるレベル以上と判断された割合は、42.2%となり、目標は達成できていない。奈良タイムについては生徒の自己評価の内容で、「知らないことを知ろうとする気持ちがとても向上した」30.8パーセント、「積極性がとても向上した」34.9%、「粘り強く取り組む姿勢がとても向上した」39.5%という結果となり、十分に満足できるレベル以上と判断される割合が60%には達していない。	C	C	主体的な活動につなげるために、課題研究や探究活動の授業をさらに活性化していく必要がある。特に自ら課題と向き合い、徹底的に取り組むなど、周囲にも大きな影響を与えられる意欲が重要になってくる。こうした観点を重要性をルーブリック等を生徒に配付しながら周知徹底させる。また探究活動の基礎を身に付けるSSP基礎・奈良タイムについてもその授業内容をさらに改善していく必要がある。
		深い学びの実現を見据えた文化講座、文化鑑賞会の充実	生徒の知的好奇心を刺激するような内容のものを提供し、満足したと回答する生徒の割合が80%以上	生徒の知的好奇心を刺激するような内容のものを提供し、満足したと回答する生徒の割合が70%以上	図書館文化講座、文化鑑賞会ともに満足度の高いものを提供できた。特に10月27日(木)実施の文化鑑賞会(ディキシーランドジャズ)における生徒向けのアンケートでは、「とてもよかった」が3学年の平均で79%であった。(とてもよかった、まあまあよかった 98.3%)	B	B	今年度は文化鑑賞会を本校の体育館で開催したが、シート敷きや椅子並べ等で職員や生徒の協力をお願いしなければならなかった。その意味でも文化鑑賞会は学校外のホールを借りて行う形が望まれる。
		図書貸し出し冊数の増加及び安定	年間貸し出し冊数の総計を例年の約1,600冊から2,000冊程度に増加	年間貸し出し冊数の総計が約1,800冊程度	令和4年度の、蔵書の貸し出し冊数は2,017冊である。今年度の数値目標をほぼクリアしている。	B	B	季節の図書館フェアにあまり手応えが感じられなかったため、もう少しテコ入れをする。具体的には図書委員による校内放送での呼びかけ等を実施し、一人でも多くの生徒の来館を促す。
3 働く意欲と働く力をはぐくむ	ICT機器を活用した教育の推進	ICTの活用など探究的な授業を教員の60%が実践	ICTの活用など探究的な授業を教員の40%が実践	Chromebookが一斉配備されたこともあり、全教員において、ICT活用が加速・定着した。	B	B	ICT活用の「程度」には、教員間で大きな差異があるのが現状である。次年度以降、より多くの教員がICTを有効に絡めながら探究的な学びを展開できるよう、底上げを図る必要がある。	
	実践的な避難訓練を通じた 防災教育の充実	年1回のシェイクアウト訓練と避難訓練の確実な実施により、避難経路の確認と、防災意識の高揚につなげる	1学期末に全校一斉のシェイクアウト訓練を実施するとともに、4月末に行った避難経路を再確認	シェイクアウト訓練については、全校生徒が一斉に行い真面目に素早く行動するなど一定の成果が見られた。避難訓練については、新型コロナウイルス感染症による出席停止生徒が見られたため、全校生徒一斉の避難は行わず各担任による避難経路の確認(実際に移動して)を実施した。	B	B	耐震における不安は幾分か解消されたと思われるが、実際のところ、避難場所(グラウンド)への通路が2か所所で広くはない上に、東側は最終階段のため、安全面には十分に配慮するなど、実際に実施してみる必要がある。	
	通学途上の安全確保の取組	通学途上における怪我等における学校保険の適用数の減少	通学途上における怪我等における学校保険の適用数を令和3年度比10%減少	最寄り駅からの通学路が歩行者専用であり、また、自転車通学生が減少したことも安全確保要因であると思われる。	B	B	歩行者専用道路を軽車両で通行しないというルールを本校生はもちろんのこと、地域住民の方にも守っていただきたい。	
	キャリア関連行事の充実	関連行事に3年間で1回以上関わる生徒の割合が100%	関連行事に関わった生徒の割合が40%	関連行事に関わった生徒の割合45% 【内訳】 上記に加えて キャリアセミナー24名(1年18名、2年6名)	A	A	左記の内容に加えて、生徒のニーズ・時代の流れに合わせた行事を提示し、参加を促す。	
		関連行事として、オープンキャンパス、大学探訪、大学研究会、インターンシップ、先輩に学ぶ会を適切な時期に企画	関連行事として、オープンキャンパス、大学探訪、大学研究会、インターンシップ、先輩に学ぶ会を適切な時期に企画	左記の内容に加えて、技術系公務員の説明会を実施した。	A	A	企画内容をさらに深めておくべく、本校OBOGの方や県庁などの外部機関と連携していく。	
	広報活動の充実	学校行事や生徒の活動の様子及び育友会活動等の様子を伝える 育友会活動の学校ホームページへの記載記事を充実する 学校通信を年2回以上発刊	学校行事や生徒の活動の様子及び育友会活動等の様子を伝える 育友会活動の学校ホームページへの記載記事を充実するとともに、学期に1回・年3回更新 学校通信を年2回発刊	学校行事や生徒がいそいそと活動できる機会がコロナ禍以前に戻りつつある中で、あわせて育友会活動についても積極的に行うことができた。よって活動内容についての報告も充実したものとなった。	A	A	1年を通して本部役員や学級委員をはじめ会員の皆様には、献身的に活動していただいた。なお、次年度からは学級委員の定数が5名から3名(内1名は教職員)となる。	

4 地域と協働して活躍する人を育てる	地域連携センター平城山の取組の推進	関連行事に、3年間で1回以上関わる生徒の割合が70%以上	関連行事に、3年間で1回以上関わる生徒の割合が50%以上	生徒会役員は、すべての地域連携事業に参加することができた。これを継続しさらにより良いものにしていくようにしていく。わくわくフェスティバルでは1・2年生の部所属の生徒50%（1・2年生生徒全体の35パーセント）以上の生徒が、参加した。多くの部が参加して、小学生・中学生との交流を深めた。	B	B	地域連携事業が、部活動や学校行事などと重なって参加できない生徒も多くいるようなので、時期やスケジュールの設定を工夫して、多くの生徒が参加できるようにしていく。
	グローバルマインドの育成	海外校との交流機会を年度2回確保し、参加生徒の満足度が90%以上	海外校との交流機会を年度2回確保（総日数：令和3年度比1.2倍）	海外校との交流機会を年度2回確保でき、総日数も令和3年度比約2倍に拡大した。	B	B	Catholic Junior Collegeとの交流を現地開催型に戻すと共に、コロナ禍前に実施していた海外語学研修についても再開するなど（ただし、開催地となる海外エリアは要検討）、交流機会の更なる充実を図る。
5 地域で個性が輝く環境と仕組みをつくる	人権教育の推進	「毎月11日は『人権を確かめあう日』」を活用して、人権問題と自己の関わり方について考え、行動できる生徒が90%以上	「毎月11日は『人権を確かめあう日』」を活用して、人権問題と自己の関わり方について考え、行動できる生徒が85%以上	85パーセントの生徒が「毎月11日は『人権を確かめあう日』」を活用して、人権問題と自己の関わり方について考え行動できるようにすることが目標であった。しかし、アンケートの結果、達成できている生徒は45パーセントに過ぎなかった。	C	C	教室掲示する際に、担任の先生、またはホームルーム代表から若干のコメントを添えいただくよう依頼する。
		人権学習ホームルームにおいて、その内容を理解し、教育活動を評価する生徒が90%以上	人権学習ホームルームにおいて、その内容を理解し、教育活動を評価する生徒が85%以上	「多様な性」「障害者問題」「ネット上の人権」「部落史」「就職問題」などに取り組んだ。アンケートの結果92パーセントの生徒が積極的に取り組んだと自己評価した。	A	A	高人教・県外教の資料を精選し、また、メディアを活用してホームルームに活用できる教材の提供に努める。
	人権教育の研究促進	教職員に対して、人権教育に関する研修機会の情報を広く知らせ、全体の90%以上の教職員が年間2回以上の研修会に参加	教職員に対して、人権教育に関する研修機会の情報を広く知らせ、全体の85%以上の教職員が年間2回以上の研修会に参加	全体の職員研修として、7月に講演会を実施し、53名の教員が参加した。学年別の職員研修として、各学年の職員研修では、全教員が参加した。年間2回以上の研修に参加した教員は、89.6%である。「全人教奈良大会」や、「多様な校種の取組に学ぶ『学級づくり』等実践部会」のような校外研修をはじめ、多くの先生方が研修会に参加した。	A	A	次年度は3年ぶりに高人教研究大会が開催される（8/10（木）奈良県社会福祉総合センター）ので、各学年2名以上の参加体制を整えるために早くから職員への呼びかけを行う。
		学校いじめ防止方針等に基づく取組	「こころといじめのアンケート」で、「本音や悩みを話せる友達がいる。」と回答する生徒の割合が90%以上	「こころといじめのアンケート」で、「本音や悩みを話せる友達がいる。」と回答する生徒の割合が70%以上	84%の生徒が本音や悩みを話せる友だちがいると回答している。いじめのアンケートでは大きな問題は発見できていないが、アンケートに答えないからいじめないという短絡的に安心することなく、個人面談等で生徒の様子を観察している。	B	B
「ヤングケアラーに関するアンケート」で、「あなたは、今のあなたの状況について、学校の先生に相談したいですか。」という質問において、先生など相談する相手がいないと回答する生徒の割合が10%以下	「ヤングケアラーに関するアンケート」で、「あなたは、今のあなたの状況について、学校の先生に相談したいですか。」という質問において、先生など相談する相手がいないと回答する生徒の割合が20%以下		「ヤングケアラーに関するアンケート」で、「あなたは、今のあなたの状況について、学校の先生に相談したいですか。」という質問において、先生など相談する相手がいないと回答する生徒の割合はゼロである。ヤングケアラーについて自覚がない生徒もいると思われるので、注意深く見守っている。	B	B	アンケートの実施と面談を通して、生徒の様子を把握していくことが重要である。	

※(E)・(F)の評価基準は目標に対して A:十分に達成できた。 B:概ね達成できている。 C:改善点や課題がある。

3 評価結果の分析、今後の改善方策等

アンケート結果から単純には評価しにくい項目もあるが、概ね目標を達成できた。
 教員研修への参加等については、参加の有無など量的な評価でなく、質的な評価をすることが今後の課題である。
 目標値を達成できた項目についても、よりよい状況に向けて、今後改善すべき課題について継続して検討したい。令和5年度は、学校満足度についてもアンケート等で読み取ってきたい。